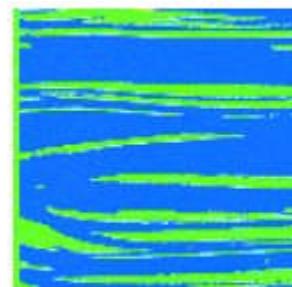


日本行動分析学会ニューズレター

J-ABAニューズ



2010年 春号 No.58 (2010年5月25日発行)

発行 日本行動分析学会 理事長 藤 健一

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内

FAX : 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL : <http://www.j-aba.jp/>

E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

新「卒論・修論データベース」について (お願い) 研究教育推進委員会
自主公開講座報告 : 科学の視点で「手話」を学ぶ～人とつながりあえる社会のために～..... 吉岡昌子
連載 : いま, こんな研究会しています(1) 茨城行動分析研究会の紹介..... 森山哲美
連載 : いま, こんな研究しています(10) 学業面で困難を示す児童への支援..... 野田 航
連載 : いま, こんな研究しています(11) “resurgence” の実験的検討..... 小幡知史
「WCBCT2004 記念若手研究奨励基金」による WCBCT2010 (ボストン) 発表助成の決定..... 広報委員会
2010 年度「日本在住学生会員の ABAI/SQAB 参加に対する助成事業」助成者の決定..... 広報委員会
2011 年度「日本在住学生会員の ABAI/SQAB 参加に対する助成事業」応募要項..... 広報委員会
<連載 : いま, こんな〇〇しています> シリーズ記事カテゴリーを増やしました..... 広報委員会
編集後記..... ニューズレター編集部

新「卒論・修論データベース」について (お願い)

研究教育推進委員会

現在, 学会事務を委託している(有)リファレンスでは, 学会ホームページ (<http://www.j-aba.jp/>)についても管理しています。学会ホームページの移設により, 従前の卒論・修論データベースを新しい「卒論・修論データベース (http://j-aba.jp/s_data/)」に移行しました。学会ホームページからリンクされていますので, 会員のみなさまにも, 是非ご覧いただければと思います。

さらに, お願いがあります。今後, この新「卒論・

修論データベース」は, 学会員, 特に大学等の教員により, 新たなデータを登録 (書き込んで) いただくこととなります。また, システム上, 以前の既存サーバにあった卒論・修論データのすべてが移行できていない可能性もあります。お手数ですが, 以前に登録されました卒論・修論データにつきましても, 登録のご確認と万が一漏れがありましたら再登録の方をよろしくお願いします。

誠にお手数をおかけしますが, 行動分析学のご発展

のために、是非ともご協力のほどをお願い申し上げます。

＜登録の方法＞

1. 学会ホームページから「卒論・修論データベース」のページに行きます。
2. インデックス [新規データ登録] をクリックします。

3. 必要事項に記入します（※なお、著者のところに名前を記入する場合、著者本人の了解を得るようにしてください）。
4. 最後に、登録者用の修正・削除用の PASS（半角英数字 8 文字まで）を入力後、[送信] をクリックします。
5. 管理者が確認した後で公開します（ご協力ありがとうございます）。

＜自主公開講座報告＞

科学の視点で「手話」を学ぶ ～人とつながりあえる社会のために～

吉岡 昌子（立命館大学）

去る 2010 年 2 月 27 日（土）に、京都の立命館大学にて「科学の視点で「手話」を学ぶ～人とつながりあえる社会のために」と題した自主公開講座を開催いたしました。

この講座は、これまで主にバリア・フリーの視点から捉えられてきた手話学習・教授という行為を、ユニバーサル・デザインの視点から捉え直すこと、そして、それに基づく手話学習の機会を実際に一般の方に提供することを目的に開催いたしました。メインの講師にお迎えしたのは、言語学がご専門で手話技能検定の創設など、手話の普及に長年取り組んでこられた神田和幸先生（中京大学）です。

講座では、まず吉岡が行動分析学の立場から、ユニバーサル・デザインの視点で手話学習を捉える意義について話をしました。その後、神田先生に「いつでも、どこでも、誰でも手話：人間の動作の意味について考える」というタイトルで講演をしていただきました。講演では、手話とジェスチャーに関してだけでなく、北欧における介護分野への民間企業の関わり方や、先

生ご自身の大学における英語教育の実践など、多岐にわたる示唆的な事例が盛り込まれ、まさにユニバーサルといった内容でした。

当日の参加者は 17 名と少人数でしたが、実際に手話を職場で使っておられる方から、初めて手話を学ぶ一般の方、教育関係者など多様な方が来られていました。来られた方の感想には「バリア・フリーとユニバーサル・デザインの相違を知り、手話に対して新たな見方をもつことができた」といったものや、「形態にとらわれず、伝えるという機能を第一に考えれば、手話やジェスチャーは聞こえる人にも有用なコミュニケーション手段になることが分かり、面白かった」といったものがありました。

講演の最後には、神田先生に手話の入門講座を開いていただきました。その教え方が非常に機能的かつユニークで、最初の段階では手話を構成する諸要素のうち、コミュニケーションを成立させるために、最低限、抑えるべきというポイントが明確に示されていたり、長年、フィールドワークをしてこられた神田先生ならではの

の表現の由来に関するお話があったり、初めて手話を学ぶ方も、負担なく楽しみながら学んでおられたようでした。私自身、聞こえる・聞こえないといった属性によらず、多くの人との間に効果的なコミュニケーションを生じさせる1つのツールとして、手話がもつ可能性を再認識し

た機会でした。

今回の講座で得たことを基に、今後もより機能的な手話学習を可能にする環境設定を検討していきたいと思います。最後になりましたが、講座の実施にあたり、助成をいただきましたことを感謝申し上げます。

<連載：いま、こんな研究会しています（1）>

茨城行動分析学研究会の紹介

森山 哲美（常磐大学）

茨城県にある常磐大学の森山哲美です。ニューズレター編集委員長の園山繁樹先生からの勧めでニューズレターを書くことになりました。私からは、茨城行動分析学研究会を紹介させていただきます。茨城県にある本学と筑波大学、そして流通経済大学の三つの大学の行動分析家が年に1回集まって、それぞれが研究活動を報告して互いの親睦を図るとともに、地域の多くの方々に行動分析学を知っていただくための機会を提供する。この二つを目的として、研究会は2008年に産声をあげました。今年で3年目を迎えました。

第1回は、2008年3月10日に常磐大学で開催されました。第1回は、それぞれの大学の研究者がどのような研究を行っているのかの報告で終わりました。しかし、地域の方々の参加もあり、彼らに行動分析学がどのような学問であるのかを理解していただくことができました。第2回は、園山先生と野呂文行先生をはじめとする筑波大学の方々を中心となって2009年3月15日に筑波研修センターで開催されました。そのときは、日本行動分析学会の「自主公開講座」として、筑波大学大学院人間総合科学研究科教授の藤原義博先生の講演が行われ、多くの地域の方々に参加しました。講演題目は、「発達障

害・知的障害をもつ人の主体的な生活をサポートする」でした。第3回は、流通経済大学の山岸直基先生が主催者となって、2010年2月21日（日）に流通経済大学の新松戸キャンパスで開催されました。新松戸キャンパスは文字通り松戸にあるため千葉県での開催となり、園山先生からは、「チバラキ研究会ですね」とのコメントいただき、笑いとなりました。第3回では、常磐大学と筑波大学のそれぞれの大学院生の諸君と流通経済大学の山岸先生の研究発表が行われました。山岸先生は、サバティカルでLattal先生のところで研究すべく渡米する直前でありました。

茨城行動分析学研究会は、上で記したとおり、年1回の3大学持ち回りの研究会であります。その目的は、上で述べたとおりであります。補足すると、茨城県の方々への、① 行動分析的支援（学習支援、発達支援、社会的活動支援など）と、茨城県における② 行動分析学の普及です。行動分析学が今後発展するかどうかは、地域の人々による行動分析学への理解が必要であると考えました。行動分析家でない方が行動分析学を敬遠する理由には、専門用語の難しさと行動分析家でない一部の研究者による誤解があると思われます。行動分析家は、そのような

傾向を嘆いたり、他者を非難したりするのではなく、行動分析家が彼らに歩み寄って真に行動分析学の普及に努める必要があると考えます。一般の人々にわかる言葉で行動分析学を説明し、興味を持っていただきながら誤解を解消する必要があります。地域における行動分析家のそのような活動が、行動分析学の普及につながると思いました。

大学の役目の一つが教育である以上、行動分析学の普及には、若い行動分析家の育成が必要です。ローカルな研究会は、学生が県外に出かけて研究することにかかわる時間的制約や経済的制約を軽減することができます。さらに、日

本行動分析学会のような大きな学会での研究活動の足がかりにもなります。彼らが育って、地域における行動分析学の普及に努めていただければ素晴らしいと思います。

以上で茨城行動分析学研究会の説明を終わらせませんが、私たちのローカルな研究会が、日本行動分析学会の一つの支部のような機能を果たすことができたならと願っております。今後も活動を続けていくつもりですが、学会の皆様からは御理解とご協力をお願いすることがあるかもしれません。そのときはよろしく願いいたします。

<連載：いま、こんな研究しています（10）>

学業面で困難を示す児童への支援

— “流暢性” の観点から —

野田 航（関西学院大学大学院研究員／日本学術振興会特別研究員 PD）

私は、関西学院大学の大学院研究員として、学業面で困難を示す児童への支援について、“流暢性 (fluency)” という観点から研究を行っています。今回、私の研究をニューズレターで紹介するという貴重な機会をいただいたこと、大変感謝しております。

行動の“流暢性”とは、簡単に言うと行動の“速さ”のことです。流暢性の研究の歴史は古く、Lindsley が始めたプリシジョンティーチング (Precision Teaching) というアプローチの中で 1970 年代に生まれました。その後、オレゴン大学の Haughton らが通常学級で実施した研究から流暢性の重要性が指摘されるようになり (Haughton, 1972), 行動 (特に学業スキル) は、単に正確に実行できるだけでは維持や般化がみられにくいこと、スラスラと流暢にできる

まで指導することで維持や般化が促進されることが明らかにされました (Binder, 1996)。現在、海外では学校規模の実践研究も実施されており、毎年参加している国際行動分析学会 (ABAI) でもたくさんの発表が行われていますが、日本行動分析学会では研究数はあまりありません。しかし、実際の教室内での児童の支援を行う経験をしてきた中で、日本の教育現場でも流暢性という観点は非常に有用だと私は確信しています。教室の中には、学業スキルの流暢性に困難を抱える (課題が解けないわけではないが、スラスラと課題が解けず、一人で継続して課題に取り組めない) 児童が非常に多くいるのです。また、学校現場では 100 マス計算に代表される基礎的学業スキルの速さを重視した反復練習は実践されているのですが、実証的かつ体系的な

方法としては確立されていません。このような問題を解決するために、これまで学校現場で流暢性に関する実証データを集めながら研究を行ってきました。

例えば、野田・松見 (2010) では、特別支援学級に在籍する5年生を対象とした漢字単語の読みスキルの流暢性指導を行いました。この研究では、“スキルの流暢性（速さ）を向上させる”ことが維持や般化（応用）を導くのかを検討するために、流暢性指導と正確さのみをフィードバックする正確性指導の効果を実験的に比較しました。その際、従来の流暢性指導研究の問題点である練習量を統制し、スキルの流暢性単独の効果を検討しました。その結果、全く同じ練習量であったにも関わらず、流暢性指導においてのみ漢字単語を読む速さが増加しました。また、流暢性指導においてのみ学習した漢字単語を含む単文を読む速さが増加していたことから、流暢性指導は、学習したスキルの般化（応用）を導くことが示されました。

また、基礎的計算スキルに関するアセスメント研究および介入研究も実施しています。アセスメント研究は、通常学級1～6年生約700名を対象として学年末に実施しました。基礎的計算スキル（四則演算）と応用的計算スキル（2～3桁の四則演算の筆算）を、「1分間でできるだけ速く正確に解く」という1分間タイムトライアルの形式でアセスメントし、算数の教研式標準学力検査NRTも実施しました。その結果、基礎的計算スキルはどの学年も正確性はほぼ確立されているが（95%以上）、流暢性（1分間で解けた問題数）は学年とともに増加し、標準偏差も増加していくことが明らかになりました。この結果は、正確性という観点のみでは捉えきれない困難さを抱える児童がいることを示唆しています。また、基礎的計算スキルは応用的計算スキルおよびNRTと有意な正の相関関係にあり、特に基礎的計算スキルの流暢性は全学年で一貫して高い相関が見られました。このデータでは因果関係は分かりませんが、「複雑なスキ

ルの要素となる基礎的なスキルの流暢性を高めることが重要である」という流暢性研究者の主張と一致する結果でした。

Noda & Tanaka-Matsumi (2010) では、通常の授業カリキュラムの中で小学2年生の掛け算スキルの継続的なアセスメントを行い、児童の習得度に応じて段階的な介入を行いました。通常の授業だけで掛け算スキルが習得できない児童には、授業時間の最後10分程度を用いた反復練習による介入を行いました。それでも習得できない児童には、3C指導法（Cover, Copy, Compare: Skinner et al., 1989）を用いた放課後学習を行いました。その結果、個人差はあるものの、各児童の掛け算スキルの正答率および流暢性が向上しました。その他にも、足し算・引き算スキルを指導した研究も行っています。

以上、いくつか研究を紹介して参りましたが、流暢性研究の中で、私が特に興味を持っているのがスキルの応用に関することです。これは、要素となるスキルが流暢になると、その要素を複数組み合わせた複合スキルが獲得されるという現象なのですが、研究者によっては随伴性アダクション（contingency adduction: Andronis et al., 1997; Johnson & Street, 2004; Layng et al., 2004）と呼んでいます。この“要素となるスキル”とそれを組み合わせた“複合スキル”の関係という、“行動と行動の関係性”に関する研究は、行動分析学の中では比較的少なく、基礎研究が望まれる分野ではないかと思えます。基礎研究から応用研究へという方向性は比較的多く見られますが、「応用研究や実践研究で発見された現象を基礎研究に戻すという方向性も、もっともっと強調されてもよいのではないか」と個人的には思っています。

最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。改めて、このような機会を与えてくださったニューズレター編集部の先生方に感謝いたします。

<引用文献>

Andronis, P. T., Layng, T. V. J., & Goldiamond,

- I. (1997). Contingency adduction of “symbolic aggression” by pigeons. *The Analysis of Verbal Behavior*, 14, 5-17.
- Binder, C. (1996). Behavioral fluency: Evolution of a new paradigm. *The Behavior Analyst*, 19, 163-197.
- Haughton, E. C. (1972). Aims: Growing and sharing. In J. B. Jordan & L. S. Robbins (Eds.), *Let's try doing something else kind of thing* (pp. 20-39). Arlington, VA: Council on Exceptional Children.
- Johnson, K. R. & Street, E. M. (2004). *The morningside model of generative instruction: What it means to leave no child behind*. Concord, MA: Cambridge Center for Behavioral Studies.
- Layng, T. V. J., Twyman, J. S., & Stikeleather, G. (2004). Engineering discovery learning: The contingency adduction of some precursors of textual responding in a beginning reading program. *The Analysis of Verbal Behavior*, 20, 99-109.
- 野田航・松見淳子(2010). 児童の漢字の読みスキルの保持・耐久性・応用に及ぼす流暢性指導の効果の実験的検討. 行動分析学研究, 24, 13-25.
- Noda, W., & Tanaka-Matsumi, J. (2010, May). Application of three-tiered instruction model for Japanese 2nd grade students to improve multiplication fact performance. Poster presented at the 36th annual convention of the Association for Behavior Analysis International, San Antonio, USA.
- Skinner, C. H., Turco, T. L., Beatty, K. L., & Rasavage, C. (1989). Cover, copy, compare: An intervention for increasing multiplication performance. *School Psychology Review*, 18, 212-220.

<連載：いま、こんな研究しています（11）>

“resurgence”の実験的検討

小幡 知史（常磐大学大学院人間科学研究科）

皆さん、こんにちは。私は、常磐大学大学院の修士課程に在籍している小幡と申します。まだまだ勉強中の身ではありますが、私の理解している範囲内で、自身の研究を皆さまに紹介したいと思います。

私は現在、ハトを対象にして resurgence(小野浩一先生著の『行動の基礎』[小野, 2005]では「復活」と訳されています)という現象を基礎的な側面から研究しています。resurgenceは、「最近強化されていた行動がもはや強化されなくなった時、以前に強化された行動が再び現れる現象」と定義されています(Epstein, 1985)。

例えば、ドアを開ける場面で考えてみると、次のようになります。

これまでドアを押したらドアが開きました。しかし突然、押しても開かなくなりました。代わりに、ドアを引いたら開きました。しかし、しばらくしてからまたドアを引いたら、開かなくなりました。その時、皆さんはどのような行動を自発するでしょうか？ 多くの人は、初めに行っていたドアを押す行動を再発させるのではないのでしょうか？ このように、以前にうまくいっていた行動がうまくいなくなった時に、過去に強化された行動が再び生起する現象が

resurgence なのです。

resurgence を実験的に最初に検討したのは、Epstein (1983)です。Epstein は、被験体 (ハト) を次の4つの実験条件に連続的にさらしました。それは、1) キーつつき行動の強化条件、2) キーつつき行動の消去条件、3) キーつつき以外の他行動の強化条件、4) 他行動の消去条件、の4条件です。4番目の条件でハトはキーつつき行動を自発させ、resurgence が認められました。

このような Epstein (1983) の研究が引き金となって、resurgence は基礎と応用の両面から研究されてきました。基礎の面では、resurgence の制御変数を明らかとするために、様々な研究が行われ、resurgence が問題解決や創造性に関与する機構であるという可能性や、問題行動の再発を検討するための実験的なモデルとなる可能性が示唆されました (Epstein, 1996; Shahan & Case, 2002; Lieving & Lattal, 2003)。また、応用の面では、実際の生活場面での問題行動を resurgence で説明しようとする研究が行われております (たとえば Volkert, Lerman, Call, & Troscclair-Lasserre, 2009; Bruzek, Thompson, & Peters, 2009)。

しかし、これまでの研究で resurgence の制御変数のいくつかは検討されてきましたが、すべての変数が実験的に検討されているわけではありません。私は、まだ調べられていない変数をハトで実験的に検討しています。一方で、これまでの研究の多くは、resurgence が起こったか起こらなかったかだけをデータの視覚的な判断で行っており、resurgence の生起を定量的に測定していません。そこで私はこのような resurgence の強度を示す適切な指標を探しています。

以上が、私が行っている研究の紹介です。かなり説明不足の点があるかと思いますが、今後も行動分析学会などで私の研究の成果を発表していこうと考えていますので、その折にはアドバイスを頂けると幸いです。

<引用文献>

- Bruzek. J. L., Thompson. R. H., & Peters. L. C. (2009). Resurgence of infant caregiving responses. *Journal of The Experimental Analysis of Behavior*, 92, 327-343.
- Da Silva. S. P., Maxwell. M. E., & Lattal. K. A. (2008). Concurrent resurgence and behavioral history. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, 90, 313-331.
- Epstein, R. (1983). Resurgence of previously reinforced behavior during extinction. *Behavior Analysis Letters*, 3, 391-397
- Lieving. G. A., and Lattal. K. A. (2003). Recency, repeatability, and reinforcer retrenchment: An experimental analysis of resurgence. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, 80, 217-233.
- 小野浩一. (2005). 行動の基礎 豊かな人間理解のために. 培風館
- Tatham, T. A., & Wanchisen, B. A. (1998). Behavioral history: A definition and some common findings from two areas of research. *The Behavior Analyst*, 21, 241-251.
- Volkert, Lerman, Call & Troscclair-Lasserre. (2009). An evaluation of resurgence during treatment with functional communication training. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 42, 145-160.

「WCBCT2004 記念若手研究奨励基金」による WCBCT2010（ボストン）で発表する若手研究者への 発表助成の決定

広報委員会

この基金は、2004年に神戸で開催された世界行動療法認知療法会議（以下 WCBCT）を共同開催した日本認知療法学会、日本行動療法学会、日本行動分析学会の3学会によって発足されたものです。この基金は、わが国における行動療法・認知療法・行動分析学の一層の発展に資することを目的とし、具体的には WCBCT2007（バルセロナ）および WCBCT2010（ボストン）に参加し発表される若手研究者の助成に使用されます。すでに WCBCT2007（バルセロナ）において、24名の若手研究者に助成がなされました。

今回の WCBCT2010（ボストン）に関する募集は1月31日に締め切れ、3学会合同の選考

委員会において助成者が決定されました。本学会からは5名の応募者があり、最終的に以下の3名の方に助成が決定しました。大会での発表を条件に、一人10万円が助成されます。

なお、発表助成は今回が最後となります。

<助成者>

- 藤田 昌也氏
(関西学院大学大学院)
- 木下 奈緒子氏
(早稲田大学大学院人間科学研究科)
- 中島 美鈴氏
(東京大学学生相談所)

2010年度「日本在住学生会員の ABAI/SQAB 参加に 対する助成事業」による助成者の決定

広報委員会

2010年度「日本在住学生会員の ABAI/SQAB 参加に対する助成事業」の応募は、去る3月31日で締め切りました。助成枠2名のところ、応募者が2名であったため、今回は公開抽選は行わず、提出書類を確認し、常任理事会において下記の2名の方を助成者に決定しました。5月末に米国テキサス州サンアントニオで開催される第36回国際行動分析学会（ABAI）での発表を条件に、一人7万5千円が助成されます。次号には体験記を掲載する予定です。

なお、次回（2011年度分）から応募要項を若干変更しました。詳細は次頁に掲載するとともに、近日中に学会ホームページに掲載します。奮ってご応募ください。

<助成者>

- 松下 浩之氏
(筑波大学大学院人間総合科学研究科)
- 沼田 恵太郎氏
(関西学院大学大学院文学研究科)

2011年度「日本在住学生会員のABAI/SQAB参加 に対する助成事業」応募要項

広報委員会

日本行動分析学会は、1983年の創立以来、行動分析学の発展に寄与してきましたが、創立20周年を機に、次世代を担う学生会員の国際的な情報交流活動を推進するために、ABAIへの参加を助成する事業を開始しました。さらに2007年度からは、事業を発展させ、SQABへの参加も助成対象に含めることに致しました。学生会員の奮っての応募を期待します。

<応募資格>

1. 2011年5月に米国デンバーで開催されるABAIまたはSQABに発表を申込み、受理された者。
2. 発表の種別は、口頭発表、ポスター発表、シンポジウムのスピーカー、パネルディスカッションのスピーカー、のいずれかであること。また、口頭発表、ポスター発表では、第一発表者であること。ビジネス・ミーティング、ABAI Expo、同窓会(reunion)、ワークショップのみの参加者は応募できない。
3. 2010年10月1日に、日本行動分析学会の学生会員として登録されている者で、ABAI/SQAB参加に対して他の資金援助を受けていない者。ただし、SABAが募集する学生発表者の大会参加費免除への同時応募は認められる。
4. 申請時に日本国内に居住していること。
5. 過去にこの事業による助成を受けた者も応募できるが、選考にあたっては、過去にこの事業による助成を受けていない者を優先する。

<提出書類>

1. 規定の応募用紙に必要事項を書き込んだもの。応募用紙は、ニューズレター、ホームページあるいは学会事務局からも入手できる。
2. ABAI/SQABに提出した発表申込書を印刷したもの。
3. ABAI/SQABが発行する発表受理書を印刷したもの。

<助成額>

応募者の中から2名に対し、1名につき75,000円を支給する。ただし、受給後、ABAI/SQABに参加を取りやめた者は返金しなければならない。

<応募締切>

2011年3月31日消印有効。

<選考方法>

過去にこの事業による助成を受けていない者を優先し、原則として、4月20日までに、事務局において公開抽選を行い、常任理事会において助成者を決定し、該当者に通知する。その他、選考に必要な事項は常任理事会で決定する。

<提出先>

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1
リファレンス内
日本行動分析学会事務局
URL : <http://www.j-aba.jp/>
E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

＜連載：いま，こんな〇〇しています＞シリーズの 記事カテゴリーを増やしました

広報委員会／J-ABA ニュース編集部

春号（No.58）から，＜連載：いま，こんな〇〇しています＞シリーズの記事カテゴリーを増やしました。これまでは＜いま，こんな研究しています＞を連載し，若手研究者・大学院生を中心に，今号までに11人の会員に執筆いただきました。これに加え，以下のカテゴリーを追加しました。

○＜いま，こんな研究会しています＞

会員が主宰する行動分析学に関する研究会を紹介し

○＜いま，こんな授業しています＞

会員が担当している行動分析学に関する授業の具体的な内容やノウハウを紹介し

○＜いま，こんな社会貢献しています＞

会員が行っている行動分析学に関する社会的な貢献活動を紹介し

J-ABA ニュース編集部から執筆の依頼もしますが，会員の皆様からの投稿原稿も歓迎します。さらに，「あの人にこんな紹介記事を書いて欲しい」といった情報の提供も歓迎します。

日本行動分析学会 第28回年次大会

＜大会＞

- 会 期: 2010年10月9,10日（土・日）
- 会 場: 神戸親和女子大学 鈴蘭台キャンパス
（神戸市北区鈴蘭台北町7-13-1）

＜懇親会＞

- 日 時: 2010年10月9日（土）18:30（予定）
- 会 場: ホテル北野プラザ六甲荘（神戸市中央区北野町1-1-14）
（大会会場より送迎バスで25分）

＜教育セッション＞

- 日 時: 2010年10月11日（月・祝）午前
- 会 場: 神戸親和女子大学鈴蘭台キャンパス
- テーマ: あの先生の行動分析学の授業が聴きたい!!

＜大会ホームページ＞

<http://www.kobe-shinwa.ac.jp/j-aba2010/index.html>

編集後記

今期のニューズレター編集部も2年目に入り、年4号の定期発行を目標に、2010年度は次のように発行計画を立てました。〔 〕: 担当委員
春号(2010年5月25日) ……〔園山〕
夏号(2010年8月25日) ……〔園山〕
秋号(2010年11月25日) ……〔野呂〕
冬号(2011年2月25日) ……〔青山〕
原稿の〆切は各号とも発行の5日前、当月の「20日」に設定しています。投稿原稿の場合は、編集部での検討の時間を含むため、当月の「15日」〆切でお願いします。

今月は28日から米国テキサス州サンアントニオで第36回国際行動分析学会(ABAI)が開

催されます。広報委員会はEXPOでJ-ABAの活動状況についてポスター発表するとともに、日本人留学生に対し、会員の皆様から寄贈を受けた日本語書籍の贈呈を行います。この2つのことは、わが国の行動分析学の海外に向けての発信、並びに、日本人留学生支援の役割を果たしています。

「連載: 海外で学ぶ学生, 海外で働く専門職」は都合により今号はお休みですが、次号から再開します。

ニューズレターの連載カテゴリーも増やしました。それ以外の内容でも結構ですので、会員の皆様からの投稿もお待ちしています。(園山)

J-ABA ニューズ編集部よりお願い

- ニューズレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内などです。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニューズレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。
- ニューズレターに掲載された記事の著

作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトで公開します。

- 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。

〒305-8577 茨城県つくば市天王台 1-1-1
筑波大学障害科学系園山研究室気付
日本行動分析学会ニューズレター編集部
園山 繁樹
E-mail: sonoyama@human.tsukuba.ac.jp